おふいすらぶ

副社長、始動

「ほら」
　差し出された徳利に、仕方なく猪口を手に取った。
　有無を言わさず連れ込まれたのは、ちょっと古い小料理屋。
「やっぱり冬は熱燗に限るな」
　一気に飲み干して手酌しようとしているのを見て、慌ててお酒を注いだ。
「似合わないですね」
「何が？」
「何もかも」
　このお店も、ぼくが隣に座っているのも。
「そうか？オレが和食が好きなのは知ってるだろ？」
　心外だと言うように片眉を上げ、「飲め」とぼくに目で勧めてくる。
「それで、お話というのは何でしょう、副社長？」
　連日残業続きで、やっと今日は早く帰れると思ったのに、
「晩飯付き合え」
　どこから出現したのか、さっさとぼくの腕を取り送迎の車に押し込まれた。
「とりあえず、オレと託生のこれからについて…かな？」
　……この男、殴っていいですか？

（2011.3.27　小話ついったー）

託生くん、秘書になる

　エレベータで最上階まで上がり、怒りのままずかずかと廊下を進んで、力任せにドアをノックした。
「入れ」
　中から聞こえてきた声に遠慮なくドアを開き、
「これは、どう言う事ですか？！」
　そのまま右手で握り締めていた四角い紙片を、豪華なデスクの前にいる男に突き出す。
「んー、辞令？」
　とぼけたような声に、カッと血が上り、
「どうして商品開発部のぼくが、秘書課なんですか？！しかも、副社長専任の！！」
　噛みついた。
　相手が、上司の上司のそのまた上の、それこそどのくらい上だか見当つかないくらい上の立場である人間である事なんて、この際もう関係ない。
「オレが、そうしたかったから」
「ビジネスに私情を挟まないで下さい！！」
「お、私情だとわかってくれてるんだ」
　ニヤニヤと笑う整った顔を殴ってやりたい。
「秘書課には、有能な人間が揃っているでしょ？それに、秘書と言うのはモデル並の綺麗な女性というのが定番です」
「お前、それドラマの見すぎ。島岡だって男だぞ？」
　そ…それは、そうだけど。
「頭の回転もにぶいですし」
「今更だろ？でも、スケジュール管理をするには関係ない」
「整理整頓苦手ですし」
「今はペーパーレスの時代だぞ」
「……コーヒーだって、インスタントしか入れれませんし」
「ネスカフェエクセラ、美味いよな」
　ことごとく論破されて、黙るしかない。
　大体、ただのサラリーマンであるぼくには、この辞令に従うしかないのだ。
「ま、そう言う事だから、三日以内に引継ぎを終わらせてこっちに来てくれ」
「……承知しました」
　これは仕事だ。例え相手が昔の男だろうと、関係ない。気にするな。
「じゃ、これからよろしくな」
　自分の感情をなんとかコントロールしようと思考を飛ばした時、声と共に口唇を塞がれた。
「んーーーっ！！」
　反射的に殴ろうとした腕を取られ、くるりと体ごと反転させられる。そのまま冷たいデスクに押さえつけられ、思う存分口内を貪られ頭の中が霞がかってきた。
　体の上の重みが退けられそっと目を開けると、
「ごちそうさん」
　満足した顔で副社長が笑った。
「セ……セ……セクハラだーーーーっ！」
　副社長の笑い声を背後に部屋を飛び出し廊下を走り、非常階段への重い扉を開けた。
　乱れた息が走ったせいなのか……あのキスのせいなのか。
「なんなんだよ、あのバカ副社長。……バカギイ」
　言葉とは裏腹な優しい口唇。思い出して、自己嫌悪に陥った。

（2011.3.28　小話ついったー）

託生くん、お引越し

　なにがなにやらわからない状態で、とにかく必死に秘書という仕事をこなし、へとへとに疲れた一日目。
「明日が休みでよかった……」
　それでも家で覚える事は山積みだけど、時間に追われた体を休ませるには充分で。
　会社からワンルームのマンションまで一時間半。
　大学の時から住んでいるマンションで、本当は会社の近場に引っ越してもよかったのだけれど、不精者のぼくには引越し先を探すのも面倒で、そのままずるずるとこのマンションに居座っていた。
　いつの間にかうとうとと居眠りをして、最寄駅の名前がスピーカーから聞こえ飛び起き、近所のコンビニで朝食代わりのパンを購入して、マンションのオートロックを開ける。
　いつもと同じような光景に、やっと家に帰ってきたと安堵の溜息を吐き、人気のない廊下を歩いて部屋の鍵穴に鍵を差し込んだ。
　真っ暗な室内はいつもの事。
　靴を脱ぎ、手探りに照明のスイッチに手を伸ばし……。
「は？」
　鞄とコンビニの袋が手から滑り落ちた。
　目の前の光景が信じられず思わず後ろを振り向き、もう一度前に向き直る。
「ない……」
　目の前には何もなかったのだ。
　朝、その辺りに放り投げたパジャマはもちろん、箪笥もカーテンもテレビもそれこそ鍋の一つさえ、言葉通り空っぽ。
「なに、これ……？」
　へなへなとその場に座りこんでしまったぼくを、非難する人間はいないだろう。
「誰が、こんな……」
　いや、わかっている。こんな事をする人間はただ一人。
「あのやろー」
　握り締めた拳を床にたたきつけた。

　ピンポーン。
　のろのろと顔を上げ、返事もせずに玄関のドアを開けた。
「葉山様、お迎えに参りました」
　仕立てのいいスーツを着こなしたこの初老の男性がどこの誰だかわからないけれど、十中八九、いや、百パーセント崎家の人間なのだろう。
「……ぼくの荷物はどこに？」
「義一様のマンションにございます」
　ほらね。
「全て新しいお部屋の方に運ばせていただき、荷解きも完了しております。葉山様のお手を煩わせるようなことはございません」
　それはそれは、ありがたいことで……なわけないだろ！
　あのヤローと四六時中一緒にいろって？！そんなの、ただの拷問じゃないか！
　にこにことぼくを促すこの人に怒っても、たぶんどうしようもない。あのヤローの指示で動いただけなのだから。
「どうぞ、こちらへ」
　歩いてきたばかりの廊下を引き返し一階まで降りると、先ほどまではなかったリムジンがマンションの前に止まっていた。
　運転手が愛想良く扉を開け、促されるまま座席に座る。

「こんな我侭、通ると思うなよ」
　このリムジンに似つかわしくないコンビニ袋が、真っ黒なレザーシートの上に浮かんでいた。

「よ。お帰……ぐっ！」
「我侭もいい加減にしろ！」
　勝手に自分の荷物を運び出され、勝手に同居が決まっているなんて、おふざけにも程がある。
「お前、何かあった時、あんな所にいたら至急来いと言っても来れないだろうが」
　ゲホゲホと咳き込んだもののすぐに立ち直り、副社長が悠々と腕を組みニヤリと笑った。
「それならそれで言ってくれたら、自分で探すよ！」
「それが面倒で、祠堂卒業後からずっと住み続けていたんだろうが」
　ぐぅの声も出ない。
　っていうか、なんで、そんな事、知ってるんだ？！
　落ち着け、葉山託生。この天下無敵の我侭男に引きずり込まれるな。
「それなら今からでも探します。ぼくの荷物はどこですか？」
「それは、ダメ」
　あのね。
「お前、どうして島岡がオレについていないのか、考えなかったのか？」
　そう言えば。
　普通に考えたら、そのまま島岡さんがつくはずなのに、どうして来ていないのだろう。
　ハテナマークを浮かべたぼくに、
「妻帯者だから」
　わかるようでわからない言い訳をした。
「はぁ？」
　なんだ、その理由は？
「ほんのわずかなタイムラグで、仕事にさしさわったことがあったんだよ。だから、同居できる独身の男が一番都合がいい」
　はっきり、きっぱり言い切る副社長に、うっかり納得させられそうになり、慌てて考え直す。
　秘書って、皆同居してるのか？そんなの聞いた事がないぞ。
　首を捻ったぼくに、
「どっちにしても、あそこはもう、戻れないからな」
　ニヤリと笑って副社長が言う。
「なぜですか？」
「明日、あのマンション解体するから」
「はぁ？！ちょ…他の住んでる人……」
「あぁ。引越し先斡旋して、もちろん引越し資金も迷惑料も払って、出ていってもらった」
　……眩暈がする。
　なに、やってんだ、この男は？！

（2011.4.21、2011.5.15　小話ついったー＋加筆）

地下倉庫は危険な香り？

「ペーパーレスの時代だなんて言ったくせに！もう、どこにあるんだよ？！」
　巨大な地下倉庫。
　過去の遺物……否、資料の山を前に、ぼくは頼まれた物を探していた。
「このあたりかな…。八年前、九年前……あった！」
　やっと見つけた十年前の資料。
　しかし。
「どうして、あんな上に置いてあるかな」
　全く手の届かない棚の一番上に、その資料の箱はあった。
　これは梯子を使うしかないな。
　ずりずりと奥から梯子を持ってきて棚に立てかけ、一段ずつ上る。ようやく資料に手が届いたとき、
「おい、見つかったか？」
「うわっ！」
　突然かけられた声に悲鳴が上がった。
「なんだよ、それ。心配して見にきてやったのに」
「すみません。突然で驚いてしまって」
　誰もいないと思ってたのに、こっちだって驚くに決まってるじゃないか。
　ムッとしたままぼくを見上げている副社長に、
「会議は終わったんですか？」
　と声をかける。
「終わった、終わった。部屋に戻ったら、お前いないんだもんな」
　そりゃ、ぼくにだってやる事があるんだから、ずっと部屋にいるわけじゃない。と、言い返したって口で勝てないのはわかっているので、
「すみません」
　おざなりに謝罪しておいた。
　片眉をあげ、
「資料、それだろ？貸せよ」
　素直に上から箱を渡すと、副社長は箱を受け取り足元に置いた。
　そして。
「あの……」
「うん？」
「その手はなんですか？」
「いや、降りるの手伝ってやろうと思って」
「結構です」
「遠慮すんなよ」
「してません！」
　ってか、どけよ、そこ！！
　差し伸ばされた手を無視して、二段降りたところでペロンと尻を撫でられた。
「うぎゃ！」
「んー、感度ばつぐん」
「なに、してるんですか？！」
「託生くんのお尻を愛でてるところ」
「愛でなくていいです！ってか、降りるから、そこ……ぎゃーーー！」
　まだ数段残っているのに、背後から両手を廻し、あちらこちらを遠慮なく撫で回す。
「やめてくださいってば！」
　ちょ…ネクタイ外すな！ボタンボタン！！
　こんのぉ、セクハラ上司！！

　そのとき、ドア付近から女性数人の声が聞こえ、ギクリと動きを止めた。近づいてくる声に、自分の今の格好を思い出して、パニックになる。
　そんなぼくを、梯子からペリッと引き剥がし、副社長は棚の影にぼくを押し込めた。息を潜めて様子を伺っていると、すんなり探し物が見つかったらしく、数分後に人の気配は消えた。
　ホッと溜息を吐いて見上げると、じっとぼくを見つめている副社長の視線にギクリとする。
　この状況、やばい。
「託生……」
「やっ……んんっ……」
　壁に押し付けられ、腕ごと抱きしめられて、熱い口唇がぼくを覆う。流されてしまう自分が嫌になるくらい、キスが上手い。
　頭の芯がぼーっと霞んできたとき、熱い手が胸元に差し入れられハッとする。
「セクハラだって、言ってんだ！」
「てーーーっ！」
　容赦なく足を踏みつけ、腕の中から逃げ出した。そのままトイレの個室に駆け込み、震える手でボタンを留めていく。
　そして数度大きく深呼吸し、心を落ち着かせた。
「あんの、セクハラやろう！ 今度コーヒーにデスソースいれてやる」
　心密かに決め、トイレのドアを開けた。
　あ、資料、どうしよ。

（2011.6.25　小話ついったー）

託生くん、社食に行く

「お腹、空いた……」
　副社長を昼食会に送り出し、溜まった書類の整理を終わらせ、昼時を少し過ぎた社員食堂にぼくは来ていた。
　ピークを過ぎた食堂内は人がまばらで、誰もいない景色のいい窓際の席に座って一息つく。
　窓から見える高層ビルの上には、真っ青な秋晴れの空が広がっていた。
「いただきます」
　小さく手をあわせ、箸を手に取る。ほかほかの唐揚げの匂いに釣られ口に入れると、ジューシーな美味しさが広がり幸せな気分になってきた。
「平和だな」
　副社長が帰ってくるまで、少しのんびりさせてもらおう。あのセクハラ男がいない時間なんて、滅多にない貴重なものなのだから。
　そう一人決めし、とりあえずは空腹を満たすことにした。
　半分ほどお腹の中に収めた頃、ざわりと空気が揺れたような気がして顔を上げた。適当に散らばり座っている社員の視線が、ぼくに集中している？
　なんとなく嫌な予感がして、ゴクリと口の中のご飯を飲み込む。
　この場から離れなければ！
　本能が危険信号を出したとき、
「唐揚げ定食か。たまには魚も食えよ」
　麗しい美声と共に秋刀魚の塩焼き定食を乗せたトレイが隣に置かれ、ガタンと椅子が引かれた。
　まさか……。
　ギギギギと首を真横に向け、
「……なに、やってるんですか？」
　呆然とここにいるはずのない男に声をかけた。
「なにって、昼飯食おうと思って。んー、やっぱりこの季節は秋刀魚だな」
　ズズズと味噌汁を飲んで、さっさとメインディッシュの秋刀魚の塩焼きに箸を刺す。
「昼食会は？！」
「あぁ、移動している最中に先方からキャンセルの連絡が来てな。もっと早くに連絡入れろってんだ。託生と一緒に食おうと思って帰ってきたら、ここにいるって聞いて来てみた」
　……眩暈がする。
　一般社員と昼ごはんを食べようと、わざわざ帰ってくる副社長がどこにいる？
　…いや、ここにいる。
　どこまでもどこまでも、我侭で傍若無人で人を振り回すことが得意な、我がセクハラ上司。
「どこかで食べてくればよかったでしょう？」
「一人で食っても、美味くはない」
　それは、そうだろうけど。
　って、突っ込むところは、そこじゃない！
「ここ社食ですよ」
「それがどうした。オレも、社員だろ？」
　いやいやいやいや、社員かもしれないけれど、普通は副社長の肩書きのある人間が来るような場所じゃない。
　黙りこんだぼくを、どう思ったのか、副社長が箸を止めた。
「ん、秋刀魚が欲しいのか？」
「いりません」
　副社長じゃあるまいし。
「遠慮すんなよ、ほら」
　ぼくの返事を無視し、副社長は、ささっと秋刀魚を一口サイズにほぐし、ご丁寧に大根おろしを乗せ

て、ぼくの皿の端に置いた。
「交換な」
　そして、勝手にぼくの皿から唐揚げを奪い取る。
「……」
　もう、なにも言うまい。
　遠巻きに、でも興味津々に見ている人達の視線が痛い。時折聞こえる女子社員の嬉しそうな悲鳴に、頭痛がしてきた。
　クールで頭の回転が速く、雲の上の存在のような人物が、社員食堂で秋刀魚の塩焼き定食…。しかも、おかずを交換など、子供じみた行動に、絶対社内でメールが飛び交うであろうことは予想できる。
「うん、秋刀魚食べないのか？」
「……いただきます」
　脂の乗った秋刀魚を口に入れ、溜息を噛み殺す。
　こんなことなら、外に食べに出ればよかった……。
　とは言っても、ここは天下のFグループ日本支社のオフィスビル。社員食堂らしい安さと、らしくない美味しさは、どこの食堂にも引けを取らない。
「美味いか？」
「はい」
　投げやりなぼくの返事に頓着することもなく、副社長は満足そうに笑い、秋刀魚の食べ方見本のように綺麗に骨だけ残して完食した。
「さてと」
　チラリと腕時計を見、トレイを右手に持ち左手でぼくの右腕を握った。
「へ？」
　がっちり拘束された右手首と副社長の顔を交互に見ると、
「帰社予定には二時間早いな。デートでもするか」
　静かな社食に響く低音。
「「「「キャーーーーーッ！！！！」」」」
　四方八方からの叫び声に、このまま気を失いたくなる。
　ナンテコトイウンダ、コノオトコハ？！
「ちょ…ちょっと待ってください！」
　ぼくのクレームを無視して鼻歌を歌いそうなくらい上機嫌でトレイを返却窓口に返し、ぐいぐいとぼくのうでを引っ張っていく。
「それとも、これから二時間、オレと副社長室に閉じこもるか？」
　耳元に口唇を寄せボソリと囁かれた言葉に、ぶんぶんと首を振る。
　このセクハラ男と密室なんて、ジョーダンじゃない！
　自分の貞操と飛び交うであろう噂を天秤にかけ、勝利したのは副社長とおでかけだった。
　デートだなんて、絶対言うもんか！！！

（2011.9.24　Blog）

副社長、社食にはまる

　ノックもなしにドアが開き、
「託生、昼飯行くぞ」
　当たり前のように副社長が呼んだ。
「……保存しますんで、少し待ってください」
「早くしろよ。オレ、腹ぺこぺこ」
　それなら、さっさと一人で行けばいいじゃないか。
　言葉を飲み込み、ついでに溜息も飲み込んで、ノートにパスワードをかけた。
　のれんに腕押し。ぬかに釘。
　なにを言ったって口で勝てないのだから、諦めるしかない。
「お待たせしました」
　ドアノブに手をかけたまま待っている副社長に声をかけ、先を促した。
「今日の日替わりはなんだろうな」
　鼻歌を歌いそうな上機嫌でエレベータに乗り込んだ副社長を見て、やはりあのときの自分の選択を間違えたと思った。社食の安さにも美味さにも負けず、外に食べに行けばよかったんだ。
　あの秋刀魚定食を食べた翌日から、副社長は毎日ぼくを誘いに来るようになった。
　どこの会社の副社長が、社食の日替わり定食を楽しみにしているんだろう。
　社食に入り副社長はトレイを手に取り、列の最後尾に並んだ。
　以前は周りの人間がギョッとして先を譲ろうとしたのだが、今は軽く会釈をするだけでトレイを持って並んでいる副社長の姿を見て驚きもしない。
「大盛りで頼む」
「はい。副社長にスペシャル大盛り～」
　と、おばさんまでこんな調子で。
　あぁ、馴染んでる。これでいいのか、我が社の副社長は……。
「ここ、いいか？」
「はははいっ！」
　それでも、やはり副社長と相席というのは敷居が高いらしく、そこにいた四人の女子社員がいっせいに背筋を正した。
「珍しい組み合わせだな」
　何のことかと副社長の視線を辿ると、そこにはお弁当箱に入れたご飯と社食のおかず。
「ごはんが多すぎるので、持ってきてるんです。節約にもなりますし……あっ」
　副社長の前で節約なんて家庭染みた言葉を言ったことに羞恥を感じたのか、顔を赤く染めた女子社員に、
「節約はいいことだよ。いい奥さんになれそうだな」
　ニコリと笑った副社長に、周りの人間も頬を染めた。
　天然たらし……。
　呆れて、黙々とご飯を食べていると、
「あのぉ、副社長」
　おずおずと、女子社員の一人が副社長に話しかけた。
「なんだ？」
「副社長と葉山さんがお付き合いをしているのは、本当なんですか？」
「ぐっ！」
　喉に詰まりそうになったご飯を、副社長が差し出した水を一気に飲んでやりすごす。
　って、今、何て？！
「ん～、わかる？」
「ちょっ！」
「あ、本当にお付き合いなさってたんですか？！」

　嬉しそうな声で再度聞く女子社員の声に、
「違います！」
　反射的に否定したものの、
「照れなくてもいいんだぞ」
「照れてません！」
　本気で言っているのに、ニヤニヤと笑う副社長にどう反論しようかと思い巡らせているうちに、
「でも、まだ、こういう状態でね」
「副社長、応援してます！がんばってください！」
「ありがとう」
　まるで選挙に立候補した候補者が応援してくれる人達とがっしり握手をしているような光景に、がっくり力が抜けた。
　がんばれって……応援って……。
　ぼくの貞操の危機を考えろーーーーーっ！！

（2011.10.30　小話ついったー）

専属秘書のお仕事

　副社長室の隣の専属秘書室。と言っても、ぼくしかいない。「秘書室」というのは別にあるから、それと区別するために専属と名前がついているだけだ。
　しかも、副社長と常時同行する第一秘書の中井さんがいるのだから、専らぼくの仕事は中井さんのアシストみたいなもの。
　これで、どうして同居しなくちゃいけないんだとも思うけれど、それに関しては諦めた。仮に引越ししたって、また、そのマンションごと買いそうな気がしたから。
　専属秘書室で伝えられていたスケジュールを入力していると、
「葉山君、副社長にコーヒーを持っていってくれないかな？」
　中井さんが顔を出した。
　外出先から戻ってきたんだな。
「はい、わかりました」
　給湯室に行きコーヒーを入れようとインスタントの瓶を手に取り、ふと思い出した。
　つい先日、どこからか企画が洩れる事件があった。内部の犯行なのは確かで、内々に捜査を行い、その犯人が判明したらしい。
　長年Fグループに勤め、部下からも、そして幹部からも信頼されていた一人の部長だった。
　そして、その人への処分や、事後処理は全て副社長の肩にかかっている。
　……と言うことを、ぼくは給湯室で一緒になった秘書室の女性から聞いた。
　上層部のみで進められた話なのに、詳細にかつ敏速に流れていく女子社員ネットワークというのは、すごいものがある。
　形ばかりノックをしてドアを開けると、副社長が難しい顔をしてノートパソコンに向かっているところだった。
「お疲れ様です」
　邪魔にならないように小さく声をかけ、そっとコーヒーを置くと、副社長はノートから視線を移してデスクに置いたコーヒーを数秒見詰め、ぼくを見上げた。
「味はわかりませんが」
　そう付け加えると、
「ありがとう」
　一口飲んでフッと肩から力を抜き、椅子の背もたれに体を預ける。
　愚痴も弱音も言える立場じゃないだろう。それこそ、社員であるぼくを相手に、なんて絶対できない。
　でも、信頼していた部下の裏切りと、その人を処分しなければならない心労は、ぼくには量りきれない。
「美味いな。何年ぶりだろうな。バニラマカダミアン」
　だから、少しでも気持ちを解してもらいたくて、豆を買ってきた。
　バニラマカダミアンの甘い香りが部屋中に充満し、さっきまでのピリピリした空気が薄れていく。
「一口、飲むか？」
「え？」
　ぼくの返事も聞かずに、片手で引き寄せられ重ねられた口唇。
　だから、セクハラだってば！！
　反射的にもがこうとして、止めた。
　……ま、今日は、大人しくしててあげるよ。

（2011.10.14　小話ついったー）

副社長、チョコをねだる

「たーくみっ」
「……葉山です。副社長」
　微妙な節をつけてドアの隙間から名前を呼んだ副社長に、顔を上げずに応えた。
　こういうときは、危ないのだ。
　無理難題を言われるか、不意を突かれてセクハラされるか。
　そんなぼくに頓着せず、スキップしそうな足取りでぼくの側に近寄り、
「チョコレート用意したか？」
　全く想定外の台詞を、副社長は言った。
「はぁ？」
　チョコレート？
　……あぁ、もうすぐバレンタインデーだった。
　どうせ、女性社員から抱えきれないほどのチョコレートを貰えるのだろうに、男のぼくに何を言ってるんだか。
「チロルチョコでいいなら用意しますよ」
　どうせ文句を言われるのだろうなと思ったぼくの耳に、
「よっしゃ。託生からのチョコ確保！」
　嬉しそうな声に呆気に取られて、顔を上げた。
　一個十円だよ？そんなので、こんなに喜ぶ？
「あの……」
「もう聞いたからな。チロルチョコ貰えるんだろ？」
「……チロルチョコって知ってます？」
「あぁ。あの可愛らしい小さい正方形のチョコだろ？」
「そうですけど……」
「十四日、楽しみにしてるな」
　と出て行った副社長の背中を見ながら、なんとなく罪悪感を感じた。
　……嫌味だったのに。豪華なチョコレートに埋もれるくらい小さなチョコレートなのに。
　ふと、先日秘書課の女性が義理チョコ用と買っていたチロルチョコの詰め合わせを思い出した。
　一個は、さすがに可哀想だよな。義理チョコ詰め合わせと知ったら、それはそれで不満な顔をするだろうけど、一個よりはマシだよね。
　って、どうして、ぼくがチョコレートを用意しなくちゃならないんだ？！
　チョコレートの話題を頭から振り払おうとして首を振り、思い出した。
「どこにいたって、バレンタインの日は会いに来るって言ったのは君なのに」
　言いたくて、絶対言えない言葉を、口の中で呟いた。

「不本意だけど、チロルチョコを用意すると言ってしまったし」
　会社近くのコンビニで、小さなチロルチョコを摘んで思案する。
「一個でいいかな……」
　どうしよう。
「あら、葉山さん」
「わわっ」
　肩を叩かれ振り向くと、制服から私服に着替えた秘書課の女性が、興味津々にぼくの手元を覗き込んでいた。
「いや、あの、これは」
「副社長ですよね？」
「えぇ、まぁ……」

　苦笑して答えたものの、
「だって『託生がチロルチョコくれるって』って、秘書室でノロけてましたし」
　続けられた言葉に、思わずチロルチョコを握り締めた。
　あんのヤローっ！なんてこと言って回ってるんだ？！
　クスクスと笑いながら、
「どうせチロルチョコを渡すのなら、面白い案があるんですけど」
「はい？」
　キラリンと瞳を輝かせた彼女が言った案に、
「……面白そうですね」
「でしょ？」
　ぼくも同意した。

「たーくみっ」
「チョコレートならあとで持っていきますから、副社長室で大人しく待っててください」
　外出先から戻ってすぐ専属秘書室のドアを開けた副社長と目も合わせずに答えたものの、それに文句も言わず、
「待ってるからな」
　ひらひらと片手を振って、機嫌良さそうに副社長はドアを閉めた。
「チロルチョコ一個に、どれだけ期待しているんだか」
　PCにパスワードをかけ、ロッカーを開けて紙袋を取り出す。
「よいしょっと。こんなにチョコレートが重いなんて、知らなかったよ」
　副社長室のドアをノックして中に入ると満面の笑顔で出迎えた副社長が、ぼくの両手に持っている紙袋を目にしたとたん呆気に取られたようにポカンと口を開けた。
「いつもお世話させられている副社長へ、どうぞ」
　ドサリとデスクの上に紙袋を置き、中からどさどさと箱を取り出していく。
　店の人が面白がって包装してくれたおかげで、見た目にはバレンタイン用のプレゼントに一応見えるけれども、この大きさがなぁ。
「開けていいか？」
「どうぞ」
　呆然と箱達を見ていた副社長が一つを手に取り、丁寧に包装を解いて……。
「託生……」
「チロルチョコです」
　次々と現れたのは、
『コーヒーヌガー』
『ミルク』
『ホワイト＆クッキー』
『きなこもち』
『ホットケーキ』
『白いちご』
『北海道ミルク100％』
『抹茶ソイラテ』
『しおパイン』
『ラズベリーチーズパイ』
『いちご大福』
　ついでに『ミルクヌガー』
　一個買うかで悩むのなら、とことん用意してみたらどうだ？との助言に、確かにそれはそうだと卸問屋まで行って箱買いしたチロルチョコシリーズ全種＆ビッグチロルその他諸々とにかく全てのチロルチョコ。

「お気に召しませんでしたか？」
「いや！こんなに貰えるとは思わなかった！サンキュ！」
　感激してそうな副社長に、ちょこっと労は報われたなと頷きつつ、部屋を出ようとしたぼくの腕を副社長が引き止めた。
「オレからも」
　そう言って副社長が紙袋をぼくに握らせ、ぼくの背中をドアに向けて押す。
「賞味期限が切れてたら、ごめん」
　退出間際に聞こえてきた声。
　自分のデスクに戻って紙袋を覗くと、そこには十個の箱と不二家のハートチョコがあった。
　祠堂を卒業してからのバレンタインデーと、同じ数だけの箱。
「バカだよ。用意するだけ無駄じゃないか」
　一番上に乗せられていたハートチョコの袋を破り苛立ち紛れに一口齧ったとたん、二人で初めて過ごしたバレンタインの夜が浮かび俯いた。
　ポツリとズボンに染みが広がる。
「塩辛いチョコなんて大嫌いだよ」
　呟きと涙がミックスされたチョコレートの味は、最低だった。

《おまけ》
「……なんですか、これは？」
「チョコレート用の冷蔵庫だ」
「チョコレート用……」
「チョコレートってのは適温があるんだぞ。託生からのチロルチョコを味わうためには、このくらい必要だ」
「このくらいって……チロルチョコに業務用冷蔵庫買うバカがいますか？！」

ギイが買ったのは、（たぶん）これです。
⇒こちら

（2012.2.12～2012.2.14　小話ついったー）

託生くん、第一秘書昇格

「託生、いたか」
「……葉山です、副社長」
　何度言えばいいんだ？社内では苗字で呼んでくれと。
　溜息交じりの声に、ひょいと片眉を上げ、
「別にいいじゃん。託生は託生なんだし」
　ぼくの抗議など右から左に流しデスクにひょいと腰掛け、ぼくの顔を覗き込んだ。
「お前、来週から、オレの第一秘書な」
「はぁ？！」
　第一秘書？！なんですか、それは？！
「中井はアメリカに戻るから、今週中にお前の仕事の引き継ぎ終わらせておいてくれ。中井からの引継ぎは……お前もオレに同行してもらった方がいいな。流れがわかるし」
「ちょ……ちょっと待ってください。急にそんな事言われても……」
　やっと第二秘書の仕事を覚えたところなのに、第一秘書なんて無理！絶対、無理！！
「急じゃないぞ。中井が戻ることは、お前がここに来る前に決まっていたことだ」
　ぼくの焦りを無視し、あっけらかんと副社長が言う。
　……なんですと？
　副社長が日本支社に来たその夜、居酒屋に引っ張り出され、翌日には秘書課に転属させられ、そのまた翌日には荷物が副社長のマンションに運び込まれていた。
　この男は、いったいいつから計画していたのか……。
「あ、これ辞令な」
　ひらりとデスクに置かれた紙切れを見て、がっくり肩を落とす。
「……わかりました」
　どうせ、しがないサラリーマン。ぼくの拒否権なんて、初めからないのだから。
「あ、ぼくの仕事の引継ぎは、どなたが……」
「うん？秘書室のやつらに言っときゃいいじゃん」
「だから、どなたかお一人、ここに……」
「必要ない」
「はい？」
「だから、専属のヤツはいらない」
　って、今までぼく、専属だったんですけど。それに、専属秘書室というこの部屋もあるんですけど。
「でも……」
「託生以外、専属にさせるつもりは一切ない」
　ぼくの言葉を遮って、きっぱりと告げた副社長の顔が近づき……。
「んーーーーーっ！！」
　椅子ごと抱きしめられて体を背もたれ固定され、蹴り上げようとした足の上に副社長が乗り上げ……ちょっと待て。あたってる！ナニかあたってる！
　こんなところで、発情するな～～～～！！
「安心しろ。キスするのは託生だけだから」
　息も絶え絶え力を抜けたぼくを抱きしめながら、意味不明の台詞をのたまう副社長の鳩尾に、
「こ……の、セクハラヤローッ！」
「ぐはっ」
　渾身のアッパーが決まった。
　崩れ落ちる副社長の背後に、画面が真っ暗になったパソコンが目に映り血の気が引く。
　データがーーーーーっ！
　……今日も、残業決定。

（2012.4.27　小話ついったー）

とあるおふぃす界隈の、とあるバーのワンシーン

「いらっしゃいませ」
「こんばんは」
　しばらくお見えになっていなかったお客様が顔を出され、私は頬をゆるませた。
　仕事が忙しかったのだろうか。確か彼はFグループ日本支社にお勤めのはずだ。
　いつものカウンター席に案内し、バーボンの水割りをお出しした。
　彼は一口飲んでほぉと溜息を吐き、同時に肩の力を抜かれたようだ。
　静かに一人で飲むことを好まれるので邪魔をしないようにそっと側を離れ、洗い上げたグラスをクロスで丁寧に拭いていると、彼から微かな振動音が聞こえた。
　携帯のバイブだったようだ。
　ディスプレイを確認した彼は眉間に少し皺を寄せたあとボタンを押し、しばらくすると振動音が消えた。
　疲れを癒すこの時間を邪魔されたくなかったのだろう。
　彼は内ポケットに放り込むように携帯を入れ、またグラスに口をつけた。
　そろそろ二杯目を用意しようかと歩きかけたそのとき、チリリンと小さくドアベルが鳴り、
「いらっしゃいま……」
「げっ」
　は？
　入ってこられた方は、カツカツとカウンターに座られているお客様の元に歩み寄り、
「ロックで。こいつにも、もう一杯。…あぁ、ボトル下ろしておいてくれ。あとは適当にこっちでやるから」
「は……はい」
　私を振り返りもせずご注文をなさった。
　お客様の前にグラスとミネラルウォーターなどを置き、ちらりと後から入ってこられた男性を盗み見た。
　こちらに来られたのは初めてのはずなのに、どこかで見たような気がする。
「逃げるなよ」
「逃げてません！……ってか、なんで、ここが」
「オレ、鼻が利くんだよな」
「……犬ですか？」
「お前、携帯の電源落とすな。緊急連絡だったらどうする？」
「……今のは緊急連絡だったのでしょうか？」
「いや、全然」
　ガックリと肩を落とした彼のグラスに、
「ほら、乾杯」
　と、勝手にカチリとグラスをぶつけ、美味しそうに喉を潤わせる。
　その様子を横目で見て諦めたように溜息を吐き、彼はグラスに口をつけた。
　彼の口調から察すると、あとから入ってきた方は彼の上司だろうか。それにしては、かなり馴れ馴れしい。
「託生が水割りを飲んでいるところを見るの、十年…いや十一年ぶりかな」
「……いつの話ですか」
　あぁ、今はともかく昔馴染みなのか、学生時代の。
「あ、いらっしゃいませ」
　ボソボソと続く話し声が気になりつつも、新しく入ってこられたお客様をにこやかにお迎えした。
　一時間ほどが経ち、ふとお二人を見ると、新しく下ろしたボトルが半分以上なくなっているのに気付いた。
　上司の方の顔色は変わらないが、いつものお客様は目が据わっている。普段と違いピッチが早いようだ。
「今日だって、あの社長令嬢に言い寄られてたくせに」
「なんだ、妬いたのか？」

「妬いてない！」
「はいはい」
　お客様の口調が、どんどん砕けている。というか絡んでいる。このような彼を見るのは珍しい。それ以前に、彼はいつもお一人で呑んでおられるのだから。
「なんで放っておいてくれないんだよ！」
「託生を諦められるわけないだろ？」
　うん？
「諦めろよ」
「なんでだよ。託生を愛してるのに」
　……なんですと？
「諦めたほうが楽だよ……ギイ……」
「わかってんだろ？オレは、ジ・エンドにはしたくないんだ」
　上司がお客様の肩を抱き寄せ、引き寄せられるままコテンと体を預け目を閉じた。
　……今のは私の空耳だったのだろうか。
　上司の方がカウンターに数枚の札を置き、お客様を横抱きにして席を立つ。
「あの……！」
「次はスコッチを頼む」
　一言言い置いて、お二人はドアの向こうに消えた。その横顔に、経済紙の一ページを思い出した。
　Fグループ次期総帥の崎義一！
　並外れたIQと世界経済をひっくり返すくらいの手腕と資本力。こんな小さなバーに来るような人物じゃないのは、確認しなくてもわかる。
　数え切れないほどの人生劇場を見てきたつもりだが、まだまだ私は甘かったようだ。
「スコッチウィスキーは、なにがお好みだろうか。バランタイン、オールド・パー……あぁ、まろやかなグレンモーレンジも用意しておくか」
　あの二人は必ずお見えになるだろう。
　いつも愁いを秘め下向き加減に呑まれていたお客様が、まっすぐに見詰めていた人物。
　私には詳細はわからないが、あのお二人の心は繋がっていると感じるから。
　あの二つの席は「RESERVED」のプレートを置いておこう。

（2012.4.30　Blog）

副社長を応援する会

「中井さん、どうしました？お疲れのようですけど」
　副社長室から出てきた第一秘書の中井さんの顔が憔悴しているように見えて、声をかけた。
「葉山さんがお休みですので、副社長がちょっと……」
　私の声に振り返った中井さんが苦笑する。
　商品開発部から抜擢され、副社長付き第二秘書となった葉山さんが風邪でぶっ倒れたのが昨日のこと。
　元から疲労が溜まっていたのだろう。
「少し風邪気味で」
　と、朝笑っていたのに、夕方には一気に熱が上がったようで、
「救急車を呼べ！」
　と副社長から内線が入った時には、いったいなにが起こったのかと秘書室の全員が目を剥いた。
　どんなときでも冷静沈着の副社長が、あれほど慌てふためいた姿などたぶんお目にかかれないだろう。
「でも、スケジュールどおり行ってるんですよね？」
「一応ですけどね。どうも今日は効率が悪いようで」
　溜息を吐きつつ「では」と、中井さんは足早にエレベーターホールに向かった。
　副社長が葉山さんに好意を持っているのは周知の事実。
　そりゃ、多少複雑な気分になるけれど、変な女とくっつかれるよりは、あの生真面目で天然で年上だけど可愛いくて誰にでも優しい葉山さんが相手なら、応援したくなるもの。
　これは秘書室全員の見解。
「なにか、私達にできること、あるかしら？」
「よね。中井さん困ってたし」
　副社長のことだから仕事に支障をきたすようなことはしないだろうけど、効率が悪いということは結局は私達の仕事が長引くということで。
「葉山さんの代わりになるもの？」
　本物に勝るものはなし。けれども、本物を連れてくるようなことはできないし。
　うーんと腕を組んで考え込んでいると、
「あ！」
　突然、香織が叫んだ。
「なに？」
「あのね……」
　香織の提案に、にんまりと頬を緩めた。
「……それ、いいかも」
「でしょ？」
　顔を見合わせて、うふふと笑う。
　Fグループ日本支社の秘書室勤務、できる女の代名詞みたいな私達のこんな顔は世の中には内緒だけど。
「今、外出してるの誰だっけ？」
「玲子が外に出ているはずだから連絡取ってみる」
「じゃ、私は社内メールで呼びかけてみるわ」
「そうだ。どうせなら広報部の子にも手伝ってもらうってのは？」
「そうよね。デザインに関してはプロだし任せる」
　すぐに秘書室に戻り、他の人間にも手伝ってもらい、きっかり一時間後。
「さすがFグループ日本支社……」
「プロ集団にかかれば、あっという間だったわね」
　副社長のためならと、たった数分でデータが集まり、広報部部長自ら指示を出して今まで見たことがないくらいの出来になった一冊の冊子。

　それを持って香織と二人副社長室のドアをノックした。
「どうぞ」
　返事を待ってドアを開け、一礼をする。
　そこには気難しい顔でノートに向かっている副社長がいた。
「どうした？」
「日本支社一同から、副社長への陣中見舞いです」
「……は？」
　大きなデスクの上に『葉山託生写真集』を置き、そのまた上にはポップな副社長に似つかわしくないフォトフレームを置く。
　玲子がいったいなにを考えて、こんな可愛いフォトフレームを買ってきたのかは謎だけど。
　副社長が呆然とアルバムを手に取りパラパラとめくった。
　葉山さんが入社して以降、社内旅行やボウリング大会、部内の飲み会などで撮ったプライベートな写真を所狭しと、でも、このままフォトアルバムの見本に使 えそうなくらい凝ったデザインの広報部の傑作と、つい最近隠し撮りされたらしい満面の笑顔の写真を入れたフォトフレーム。
　厳しい目をしていた副社長の目尻がホッと緩んだ。
「ありがたく受けとるよ」
「いえ、あと、これはデータです」
「あぁ」
　小さなメモリーカードを手に取り、ロックがかかっているのに気付いたのか、副社長がクスリと笑う。
「それでは失礼します」
　なんとなくこっちまで嬉しくなって足取り軽くドアを開け、ふと振り向いた視界に入った副社長の顔は、思わず見とれてしまいそうになるくらい、切なそうな表情をしていた。
　その後、異例の副社長からの社内メールが入り、各部には副社長からの二日酔いどころか三日酔いにさせる気か？と思われるほどのアルコール類、ダイエッターが号泣してしまったほどのお菓子類（しかも、どれも最高級品）が届けられた。
　三日後、出社してきた葉山さんが副社長のデスクの上に置かれていたフォトフレームに、またぶっ倒れそうになっていたのは別の話。
　副社長、がんばってくださいね。
　Fグループ日本支社一同、副社長を応援してます。

(2012.7.21作業時間が持てたのでBlogより転載)

その他

2011年08月13日(土)
「人を好きになるのなんて、その人間の自由だろ？」
「それは、そうだけど…」
「だったら、オレが託生を愛してるのはオレの自由だと思うけど？」
「そうだけど！でも、ぼくは…！」
「オレを好きだろ？」
「…っ！」
「でなければ、お前のことだ。さっさと退職してるだろ？」
おふぃすらぶ〜♪

2011年08月07日(日)
「経済学部……お前、音大は？！」
「止めた。趣味でバイオリンをやっていくなんて、贅沢すぎるよ」
「なんだよ、その言い訳？！」
「言い訳じゃないよ。現実だ」
「もう、バイオリンは弾かないってことか？」
「そうだね」
「……理由を教えてくれ」
「さっき言ったとおりだよ。現実的じゃない。音楽の道を行くなんて、ぼくには無理だ」
「なら、オレが……」
「ぼくが、そういうのが嫌なのわかってるだろ？それに……」
「託生？」
「ギイこそ、いい加減、ぼくを言い訳に使うの止めてくれよ」
「……？！」
「ギイは無理なんてしていないって言うけど、それこそが迷惑なんだよ。ギイのやるべきことをやってほしいんだよ。ぼくは足を引っ張りたくないんだよ」
「そんなこと……！」
「ある！今までも、そうだった。これからは、もっと無理するだろう？アメリカと日本に離れるのだから」
「託生が気にすることはないんだ！オレが、そうしたいから……」
「だから、それが迷惑なんだってば！」
「託生……！」
「とても幸せな夢を見せてくれて、ありがとう。ギイはギイの道を歩いていってほしい」
「なにを言ってる？！オレは別れる気なんてないぞ？！」
「……夢の時間は終わりなんだよ。これからはFグループの後継者として……」
「託生！！」
「さよなら」
……卒業間際の不安定な時期。そこにつけこんで、裏から親父が託生に話をしたのを知ったのは、今から一年ほど前のことだ。
今なら……力をつけた今なら、託生を守れる。
今度こそ、託生を離さないために。
あいつが、どれだけ嫌がったって、絶対手に入れてみせる。……絶対に！

会議室と雨

「ヤバイ。あれがないと今日の仕事に差し支えるのに」
　昨晩の会議のメモ。
　副社長とマンションに戻り、自分の部屋に帰って入力しようと鞄の中を探ったもののメモは見当たらず、会議室に忘れてきたことに気付いて血の気が引いた。
　社に戻るにはあまりにも遅い時間だったので、翌日の早朝、警備室から鍵を借り、ぼくは会議室に足早に向かったのだ。
　ドアを開け手探りでスイッチを入れて、ぼくが座っていた机周りを探す。
「あった……」
　最終の会議だったから、あのあと誰もこの部屋に入っていないのだろう。あっさりと見つかったメモに、深い溜息を吐いた。
　ドアを施錠し鍵を返したぼくは、自動販売機で買った缶コーヒーを手に、専属秘書室のドアを開けた。
「そろそろ梅雨が終わってもいい頃なのに……」
　閉め忘れたカーテンの向こうには、ビル街を洗い流すような激しい雨が降っている。
　……雨は嫌いだ。
　もう大丈夫だと思っていたのに、一人雨の中に立ったとき気づいた、ぼくの心。
　祠堂で雨の冷気を感じなかったのは、隣に彼がいたからだ。
　あの日から、ぼくの心は凍ったまま。
　彼の父親から告げられた言葉は、人の道を外しそうな子を思う親として、当たり前すぎるものだった。
　何の因果か、今、彼の秘書として側にいるけれど、いつか……彼にふさわしい人間が隣に立つだろうことを、自分の心を殺して待っている。
　雨の雫を追うように、曇り一つない窓に指を置き、つつつと滑らしたそのとき、ぼくの手を包み込んだ大きな手。
「一声かけていけよ」
「……メモを置いていたはずですが」
「水を零しちまって、読めなくなったんだよ」
　そう言って、包み込まれた背中の暖かさに安堵の溜息が零れ出た。
　当たり前のように感じていた、この温もり。拒否しないといけないのに、この腕から抜け出せない。
「泣くなよ」
「泣いてなんか……」
　そっと振ってきた口唇。
　柔らかく包み込んで、ふと離れ、
「ここが、泣いてるだろ？」
　吐息がかかる距離で囁かれ、指が心臓の上を押した。
　今だけ……目を閉じているほんの少しの時間だけ、夢を見ても許されるだろうか。
　窓に置いた指が、スーツの布地を掴む、その間だけ。

（2012.1.14　小話ついったー）

奥付

おふぃすらぶ

りか

URL http://greem.shop-pure.net
MAIL greenhouse@shop-pure.net